

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、8月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（8月）

令和8年7月31日
愛媛県

1 予報の概要

作物名	病害虫名	発生量	その他
水稻	いもち病 （早期：穂いもち） （普通期：葉いもち） 紋枯病 セジロウンカ トビイロウンカ イチモンジセセリ フタオビコヤガ コブノメイガ 斑点米カメムシ類	やや少～並 やや少～並 並～やや多 並～やや多 やや多～多 並～やや多 やや少～並 やや多～多 並～やや多	
果樹共通	果樹カメムシ類	やや多	飛来時期：並～やや早
かんきつ	かいよう病 黒点病 ミカンハダニ ミカンサビダニ ヤノネカイガラムシ	並 並 やや少～並 並～やや多 －	発生時期：並
かき	炭疽病 うどんこ病 フジコナカイガラムシ	並 やや多 やや少～並	
夏秋きゅうり	黄化えそ病 褐斑病 炭疽病 アブラムシ類 タバココナジラミ	並 やや少 やや多 やや少～並 並～やや多	
夏秋なす	アブラムシ類 ミナミキイロアザミウマ ハダニ類 タバココナジラミ	多 並 少～やや少 並～やや多	
夏秋トマト	葉かび病 アブラムシ類 タバココナジラミ オンシツコナジラミ	並～やや多 並～やや多 並～やや多 並～やや多	
いちご育苗床	炭疽病 アブラムシ類 ハダニ類 コナジラミ類	並～やや多 少～やや少 やや少～並 並～やや多	
さといも	疫病 アブラムシ類 ハダニ類 ハスモンヨトウ	並 やや少～並 少～やや少 並～やや多	
夏秋野菜全般	アブラムシ類 ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ オオタバコガ	やや少～並 並～やや多 やや多～多 やや少～並	

※発生量は、対平年

2 気象予報（高松地方気象台）

1 か月予報 7月23日発表（7月25日～8月24日）

〈 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 〉

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 10 並 20 高 70% 高い見込み	少 40 並 30 多 30% ほぼ平年並の見込み	少 20 並 40 多 40% 平年並か多い見込み

〈 予報のポイント 〉

- ・暖かい空気に覆われやすいため向こう 1 か月の気温は高く期間の前半はかなり高くなる見込みです。
- ・期間の前半の高気圧に覆われやすいため、向こう 1 か月の日照時間は平年並か多いでしょう。

3 病害虫の発生予想

水 稲

(1) いもち病（早期：穂いもち、普通期：葉いもち）

ア 予報の内容 発生量：（早期）やや少～並 （普通期）やや少～並

イ 予報の根拠

- （ア）7月の巡回調査では、葉いもち発生圃場率は早期は平年並、普通期はやや少、発病度は早期、普通期ともやや少であるが、上位葉に発病が認められる圃場が確認されている。
- （イ）7月1～26日までのBLASTAMによる葉いもち感染好適条件出現の判定では、感染好適日が7月1、5、6日に複数地点で認められている（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。
- （ウ）気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

- （ア）窒素質肥料（穂肥）の過用を避ける。
- （イ）圃場観察に努め、葉いもち発生圃場で病勢が進展している場合には、早急に薬剤防除を行う。
- （ウ）今後、出穂期となる水稻では、穂いもち対策として出穂期の基幹防除を実施する。

(2) 紋枯病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- （ア）7月の巡回調査では、早期の発病度はやや多、普通期は平年並である。
- （イ）普通期の茎数は平年並である。
- （ウ）気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- （ア）早期では、止葉から下位3葉の葉鞘に病斑を生じると収量に影響するので、登熟後期の病勢進展が予想される場合は、追加防除を行う。
- （イ）普通期では、発生状況により応急防除を実施する（要防除密度：穂ばらみ期の発病株率 15～20%）。
- （ウ）薬剤が株元までかかるように散布する。

(3) セジロウンカ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- （ア）7月の巡回調査では、早期で平年並、普通期はやや多の発生である。
- （イ）県下6か所の予察灯では6月第2半旬、7月第1～2半旬に誘殺され、7月第4半旬までの累計誘殺数は155頭（平年133.6頭）で、平年並である（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。
- （ウ）気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、飛来後の増殖にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- （ア）普通期で箱施用剤を処理していない圃場では、発生に注意する。
- （イ）防除は薬剤が株元までかかるように行う。

(4) トビイロウンカ

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

- （ア）7月の巡回調査では、発生を認めていない。
- （イ）7月の広域調査（119圃場）では、発生を認めていない。
- （ウ）県下6か所の予察灯では、7月第1～2半旬に誘殺され、7月第4半旬までの累計誘殺数は4頭（平年1.6頭）で、やや多である。

- (エ) 同時に飛来すると考えられるセジロウンカが6月第2半旬に予察灯で誘殺され、同時期の他県では本虫の誘殺も確認できることから、一部この時期の飛来もあったものと推測される。
- (オ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、飛来後の増殖にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察により、早期発見に努める。
- (イ) 今後、出穂期となる水稻では、出穂期の基幹防除を実施する。特に、5月移植で8月中旬以降の収穫となる作型や、普通期で本虫へ効果の高い箱施用剤を処理していない圃場では、発生に注意する。
- (5) イチモンジセセリ (イネツトムシ：第2世代)
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月の巡回調査では、第一世代の発生量は平年並である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (イ) 圃場観察により、発生が多い場合には若齢幼虫期(ツトの発生初期：8月上中旬)に防除する。特に、本虫に効果のある箱施用剤を処理していない圃場では注意する。
- (6) フタオビコヤガ (イネアオムシ)
- ア 予報の内容 発生量：やや少～並
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月の巡回調査(普通期)では、発生を認めていないが、広域調査では、本虫に適用の無い箱施用剤を使用している圃場を中心に一部で発生を認めている。
- (イ) 県下6か所の予察灯での誘殺数は、2か所で多く、3か所で少ない。(防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察に努め、8月に密度が急増する場合があるので注意する。
- (イ) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (7) コブノメイガ
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多(普通期)
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月の巡回調査では、早期は平年並、普通期はやや多の発生である。
- (イ) 7月上旬には複数の圃場で被害葉が認められ、いずれも幼虫は確認できなかったことから6月上旬には最初の飛来があったものと推測される。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (イ) 防除適期は、粒剤では成虫発生最盛期、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後(若齢幼虫期)である。
- (8) 斑点米カメムシ類(早期・普通期)
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月の巡回調査では、本田での発生は、早期、普通期とも平年並である。また、畦畔での発生は、早期で平年並、普通期でやや少である。
- (イ) 県下6か所の予察灯での誘殺数は、2か所で平年より多くなっており、いずれもアカスジカスミカメが急増している。(病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場周辺の除草を行う。なお、出穂直前の除草は、カメムシ類を圃場内に追い込む可能性があるため、出穂15日前までに行う。出穂20日前と出穂時に2回実施するとより効果的である。
- (イ) 出穂期の基幹防除で密度を下げ、乳熟期～糊熟期(出穂後10～14日頃)に地域の防除指針に従い防除する。多発時には、さらにその7～10日後に防除を行う。
- (ウ) 要防除水準は、乳熟期の20回掬い取り調査による虫数が大型種で1頭、小型種で3頭である。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 7月の巡回調査では、葉で平年並、果実で平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病果や発病葉は早期に除去し、園地内の病原菌密度の低下を図る。

(イ) 強風により付傷すると発病が助長されるので、防風垣や防風ネットを整備する。

(ウ) 夏秋梢では、ミカンハモグリガの食害痕が病原細菌の侵入箇所となるので、防除を行う。

(エ) 甘平、愛媛果試第48号、はれひめ等の罹病性品種は注意する。

(オ) 既に発生が認められる園地では、早めの防除に努める。

(2) 黒点病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 7月の巡回調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 枯死枝は早期に除去し、適切に処分する。

(イ) マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は、累積降水量が200～250mm（または散布後30日）に達した時である。ただし、本病に対して罹病性の高い品種せとか、河内晩柑、清見等の散布間隔は、累積降水量150～180mm（または散布後25日）とする。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 7月の巡回調査では、寄生葉率、1葉当たり雌成虫数とも平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地内の早期多発樹で、1葉当たりの雌成虫が平均2～3頭に達した時期が防除の目安となる。

(イ) 薬剤は、かけむらのないように散布する。

(4) ミカンサビダニ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月の巡回調査では、発生は平年並である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 被害果は、その後の発生源となるので、早期に除去し適切に処分する。

(イ) 局所的に発生するため、園地観察を行い、発生後は早期防除に努める。

(5) ヤノネカイガラムシ（第2世代）

ア 予報の内容 発生時期：並

イ 予報の根拠

(ア) 第2世代幼虫の初発は八幡浜市合田では7月18日（平年：7月18日）、松山市下伊台では7月22日（平年：7月23日）で、両地点とも平年並である。

ウ 防除上の注意

(ア) 防除は、第2世代幼虫初発生から30日後を目安とする。

(イ) 幼虫初発日は、病害虫防除所ホームページ掲載データを参照。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 7月の巡回調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地観察に努め、発病枝・発病果は早期に除去し、園外で適切に処分する。

(イ) 定期防除に努める。

(2) うどんこ病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月の巡回調査では、多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 通風、採光を図る。

(イ) 防除は、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(3) フジコナカイガラムシ（第2世代）

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 7月の巡回調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 防除は、若齢幼虫の発生状況に応じて行い、多発園や常発園では1回目防除の3週間後に2回目を行う。

果樹共通（キウイフルーツ、かき、かんきつ等）

(1) 果樹カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：やや多（新成虫） 飛来時期：平年並～やや早

イ 予報の根拠

(ア) 県内のトラップでの誘殺状況は、7月第1～4半旬累計では、集合フェロモントラップで5か所中4か所、予察灯9か所中4か所の誘殺数が平年より多くなっている（病虫害防除所ホームページ参照）。県下合計では、集合フェロモントラップで平年の2.37倍、予察灯で平年の1.76倍であるが、警報を発出したR6年比では、集合フェロモントラップで0.49倍、予察灯で0.30倍となっている。

(イ) 県内12地点（7月中旬調査）のヒノキ球果の結実量は、地点間差が大きいものの、県全体としては並である（表）。

(ウ) ヒノキ球果の果樹カメムシ類寄生虫数調査（10か所掬い取り）は、平均捕獲虫数は4.58頭／地点であり、平年（0.90頭）に比べ多い（表）。

(エ) 山林からの離脱の目安となるヒノキ球果の口針鞘数は、1.43個／球果（平年1.27個／球果）と平年並、新成虫がヒノキを離脱する25個／球果に達している地点はない（表）。

(オ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的であり、新成虫の園地への飛来時期は平年並～やや早いと予想される。

ウ 防除上の注意

(ア) 飛来時期、飛来量は地域、園地により異なるため、早期発見に努める。

(イ) 山林から果樹園に飛来するため、山林に近い園地での被害が多い傾向にある。

(ウ) 園地への飛来は、曇天で夜温があまり下がらない日の日没30分後～3時間後に多くなるので、防除はそれが想定される日の夕方が効果的である。

(エ) 飛来した成虫は集合フェロモンを放出し、同種の成虫を引き寄せるため、飛来初期の防除が重要である。

(オ) 飛来が続く場合は継続的な防除が必要であるが、ミカンハダニとカイガラムシ類の異常増殖（リサージェンス現象）が起こる可能性があるため、散布後の発生には注意する。

(カ) 薬剤は登録内容に応じて使用するが、周辺作物や生物（魚・蚕・ミツバチ等）に影響を及ぼさないよう注意して選択する。

表 果樹カメムシ類 ヒノキ球果調査 (2026年7月調査)

調査地	ヒノキ球 果 結実量	10回すくい取り虫数						合計	口針鞘数 ／球果
		チャバネアオ		ツヤアオ		クサギ			
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
四国中央市土居町天満	中	2	0	1	0	0	0	3	0.05
西条市丹原町川根	中	1	0	0	0	0	0	1	0.45
今治市菊間町西山	中	1	0	0	0	1	1	3	1.60
今治市玉川町龍岡下	多	1	0	0	0	0	0	1	1.15
松山市菅沢（栗井）	中	6	0	5	0	1	0	12	2.55
久万高原町明神	多	3	4	0	0	0	0	7	1.05
砥部町鶴ノ崎	多	7	1	3	1	1	0	13	3.15
伊予市双海町高岸	やや多	6	4	0	0	0	0	10	3.35
内子町五十崎	やや少	0	0	0	0	0	0	0	0
宇和島市柿原	中	2	0	0	0	0	0	2	2.95
西予市宇和町西山田	やや多	1	0	1	0	0	0	2	0.10
愛南町城辺緑	少	1	0	0	0	0	0	1	0.70
今年の平均値		2.58	0.75	0.83	0.08	0.25	0.08	4.58	1.43
平年値		0.74	0.04	0.03	0	0.04	0.12	0.90	1.27
今年の順位		1	1	1	1	2	4	1	4.00

野 菜

(1) 黄化えそ病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量:並

イ 予報の根拠

(ア) 7月の巡回調査では、発生はやや少である。

(イ) 媒介虫であるミナミキイロアザミウマの発生はやや少である。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は直ちに抜き取り、適正に処分する。

(イ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。

(ウ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。

(2) 褐斑病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量:やや少

イ 予報の根拠

(ア) 7月の巡回調査では、発生はやや少である。

(イ) 気象予報では、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 草勢低下、窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(3) 炭疽病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量:やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月の巡回調査では、発生はやや多である。

(イ) 気象予報では、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

- (4) 葉かび病（夏秋トマト）
 ア 予報の内容 発生量：やや少～並
 イ 予報の根拠
 (ア) 7月の巡回調査では、平年並の発生である。
 (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。
 ウ 防除上の注意
 (ア) 草勢が衰えると発病しやすくなるので、肥切れしないよう適正な肥培管理に努める。
 (イ) 定期的な薬剤防除を行い、薬液が葉裏までかかるように散布する。
- (5) 炭疽病（いちご育苗床）
 ア 予報の内容 発生量：並～やや多
 イ 予報の根拠
 (ア) 7月の広域調査では、平年並の発生である。
 (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。
 ウ 防除上の注意
 (ア) ランナー、葉柄、小葉に病斑が見られる株は、伝染源となるので直ちに除去する。特に小葉は本病に対する感受性が高く発病しやすいので、この部位を中心に発病把握に努める。
 (イ) 降雨によって胞子が飛散するので、降雨前後に防除を行う。
 (ウ) 底面・株元給水は雨よけ栽培との併用で本病の防除効果が高い。なお、頭上灌水を行っている圃場では、夕方遅い時間の灌水は避ける。
 (エ) 定期的な薬剤防除を行い、薬液が葉裏までかかるように散布する。
- (6) 疫病（さといも）
 ア 予報の内容 発生量：並
 (令和8年7月7日付け令和8年度病害虫防除技術情報（第3号）参照)
 イ 予報の根拠
 (ア) 7月の巡回調査では、発生を認めていないが、県内の初発を7月3日に確認している。
 (イ) 気象予報では、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
 ウ 防除上の注意
 (ア) 圃場観察を行い、発病茎葉は早急に除去し、圃場外に持ち出し適切に処分する。
 (イ) 風雨によって遊走子が飛散し、急速に蔓延するので、発生圃場では治療効果のある薬剤で防除を行う。
 (ウ) 発病前の防除に重点を置く。
- (7) アブラムシ類（夏秋トマト、夏秋なす、夏秋きゅうり、さといも、いちご育苗床、夏秋野菜全般）
 ア 予報の内容 発生量：夏秋トマト 並～やや多
発生量：夏秋なす 多
発生量：夏秋きゅうり やや少～並
発生量：さといも やや少～並
発生量：いちご育苗床 少～やや少
発生量：夏秋野菜全般 やや少～並
 イ 予報の根拠
 (ア) 7月の巡回調査等では、夏秋トマトは平年並、夏秋なすは多、夏秋きゅうりはやや少、さといもはやや少、いちご育苗床は少の発生である。
 (イ) 黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は、少～平年並で推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。
 (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。
 ウ 防除上の注意
 (ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。
 (イ) 定植時にアブラムシ類に登録のある粒剤を施用するとともに、シルバーポリマルチ等の物理的防除を行う。
- (8) ミナミキイロアザミウマ（夏秋なす）
 ア 予報の内容 発生量：並
 イ 予報の根拠
 (ア) 7月の巡回調査では、やや少の発生である。
 (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。
 ウ 防除上の注意
 (ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。

- (イ) 薬剤防除は、薬液が葉裏までかかるように散布する。
- (ウ) 卵・蛹には薬剤の効果が悪いため、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。
- (エ) 雑草でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。

(9) ハダニ類（夏秋なす、さといも、いちご育苗床）

ア 予報の内容	発生量：夏秋なす	少～やや少
	発生量：さといも	少～やや少
	発生量：いちご育苗床	やや少～並

イ 予報の根拠

- (ア) 7月の巡回調査等では、夏秋なす、さといもでやや少、いちご育苗床で平年並の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。
- (イ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (ウ) 多発圃場では、散布間隔を短くして密度抑制に努める。
- (エ) 雑草でも繁殖するので、圃場内外の除草を行う。

(10) コナジラミ類（夏秋トマト、夏秋なす、夏秋きゅうり、いちご育苗床）

ア 予報の内容	発生量：夏秋トマト	タバココナジラミ	並～やや多	オンシツコナジラミ	並～やや多
	発生量：夏秋なす	タバココナジラミ	並～やや多		
	発生量：夏秋きゅうり	タバココナジラミ	並～やや多		
	発生量：いちご育苗床	コナジラミ類	並～やや多		

イ 予報の根拠

- (ア) 7月の巡回調査では、夏秋トマトでタバココナジラミは平年並、オンシツコナジラミは平年並、夏秋なすでタバココナジラミは平年並、夏秋きゅうりで、タバココナジラミは平年並、オンシツコナジラミは発生を認めていない、いちご育苗床でコナジラミ類が平年並である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 定期的な薬剤散布を行い、薬液が葉裏までかかるように散布する。
- (イ) 雑草でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。
- (ウ) コナジラミ類には、トマト・きゅうりのウイルスを媒介するものがあるので注意する。

(11) ハスモンヨトウ（大豆、さといも、夏秋野菜全般）

ア 予報の内容	発生量：並～やや多
---------	-----------

イ 予報の根拠

- (ア) フェロモントラップによる誘殺数は、7地点中6地点で平年より多くなっている（病虫害防除所ホームページ掲載データを参照）。
- (イ) 7月の巡回調査では、さといもの食害面積率は平年並、寄生虫数は平年並である。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め（大豆では白変葉の発生）、若齢幼虫期に防除する。

(12) オオタバコガ（夏秋野菜全般）

ア 予報の内容	発生量：やや少～並
---------	-----------

イ 予報の根拠

- (ア) フェロモントラップによる誘殺数は、5地点はいずれも平年より少なく推移している（病虫害防除所ホームページ掲載データを参照）。
- (イ) 7月の巡回調査では、夏秋トマト（タバコガ類）での発生は平年並である。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(13) シロイチモジヨトウ（ねぎ、夏秋野菜全般）

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) フェロモントラップによる誘殺数は、5地点中3地点で多くなっている（病虫害防除所ホームページ掲載データを参照）。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

【病虫害発生予察情報】

愛媛県病虫害防除所ホームページでご覧になれます。

ホームページアドレスは、<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojou/>

【農薬使用時の注意】

◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。

◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。

◎病虫害等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。

◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。

◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。

◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。

◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。

◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。